

## 領解文

もろもろの雑行雑修自力のこころをふりすてて、一心に阿弥陀如来、われらが今度の一大事の後生、御たすけ候へとたのみまうして候ふ。

たのむ一念のとき、往生一定御たすけ治定と存じ、このうへの称名は、御恩報謝と存じよろこびまうし候ふ。この御ことわり聴聞申しわけ候ふこと、御開山聖人（親鸞）御出世の御恩、次第相承の善知識のあさからざる御勸化の御恩と、ありがたく存じ候ふ。

このうへは定めおかせらるる御掬（おんおきて）、一期をかぎりまもりまうすべく候ふ。

本願寺釈法如（花押）

五〇年以上前になろうか、本願寺での得度習礼を通してこの御文を丸暗記させられたことを懐かしく思う。当時は教学的素養も乏しく、専門用語も当時の若者の語感からは理解の域を超えていた。しかし、何度も反復反芻してお経を誦んじる要領で課題試験に臨んだのを覚えている。この度、この領解文の改訂版？とも言うべきものが出されたのをきっかけに、従来の領解文を読み直してみた。長い間に培われた宗学的裏付けがあるせいか、さすがに銘文であることをことさら感じ入った次第である。



本願寺第八代・本徳寺開基蓮如上人

蓮如上人の時代は念仏信仰が盛んで、親鸞聖人の領解と異なる色々な安心が横行していた。そのような混乱を是正するために模範的な信仰告白として領解文を作られた。

この領解文は蓮如上人の作とされているが明確な証拠はない。真宗大辞典を見ると、事の起りは、蓮如上人の時代に報恩講が営まれた時、腹心の者を御堂に残して、各自の領解（信仰告白）を述べさせたのが発端らしい。その際、十人十色の告白がなされ、その内容が親鸞聖人の安心におぼつかないものや見当違いのものが散見されたため、領解の模範解答なるものを上人が制作なさったとされている。それ以後、この領解文が江戸時代に宗学理論の形成によって教団

の宗意安心として洗練され、長い年月をかけて手直しが施され、法如上人の時に公式の領解文として完成したと思われる。

## 本願寺「新しい領解文」の変



令和五年一月一六日報恩講の最終日に現門主・宣如上人が「新しい領解文」（浄土真宗のみ教え）として発布された。

## 新しい領解文（浄土真宗のみ教え）

南無阿弥陀仏

「われにまかせよ そのまま救う」の弥陀のよび声

私の煩惱と仏のさとりは本来一つゆえ

「そのまま救う」が弥陀のよび声

ありがとつと いただいで

この愚身をまかす このままで

救い取られる 自然の浄土

仏恩報謝の お念仏

これもひとえに

宗祖親鸞聖人と

法灯を伝承された 歴代宗主の

尊いお導きに よるものです

み教えを依りどころに生きる者となり

少しずつ 執われの心を 離れます

生かされていることに 感謝して

むさぼり いかりに 流されず

穏やかな顔と 優しい言葉

喜びも 悲しみも 分かち合い

日々に 精一杯 つとめます

令和五年 一月十六日

龍谷門主 釋專如

さて、今年になって我が教団が深刻なハレーションを起している。教団上げての大法要が終わったが、「新しい領解文」騒動で持ちきりである。この発端は令和五年一月十六日に専如門主の名で発布された「新しい領解文」である。「伝統的な宗学に慣れ親しんできた古い人間にとっては突っ込み処満載の文章である。



18世紀末三業惑乱をへて1807年に権限の特化した能化職を廃止し、1824年に勸学職を置いて西派の教学部門は集団指導体制となる。現在は勸学・司教を定め勸学寮を寮頭を始め5人体制とし、宗門の宗意安心の裁定機関としての役割を担っている。「新しい領解文」発布にあたり、若手の勸学や司教からなる有志の会が、総局と勸学寮の不透明な関係を指摘すると共に、その問題点を指摘して今までに6回の声明文を出している。

最初のご文に触れたとき、私はさほど気にも留めず受け流していたが、普段は無口な坊主が即座に「何か変よネ」の第一声に目を覚まされた。

勿論、この「新しい領解文」がご門主の名前で表明されたことは、教団の規則に則りそれなりの手続きを踏んで用意されたものであるにちがいない。それにも

関わらず、「浄土真宗本願寺派 勸学・司教有志の会」の方々によって「新しい領解文」（浄土真宗のみ教え）の問題点が詳細に指摘され、これを直ちに取り下げべきであることが表明された。これは宗意安心に関わることだから、総ての門信徒が安心して出言できる文言にあらためて作成し、真の現代版「領解文」として制定すべきである旨が表明された。その後、一般社会に対して記者会見がもたれてこの重大さが周知された。以来、ネット社会のもつ拡散性により、一挙に僧侶はもとより宗門の内外で持ちきりのこととなった。

ネット上では、この「新しい領解文」を巡って、単なる新しいものに対する不快感の表明であったり、宗学上の問題点の指摘であったり、宗法上の手続きの不備を問うものであったり、門主と総局と勸学寮の不透明な関係を指摘するものであったり、時代に適応できない教団組織の問題に言及したり、挙げ句の果てに教団内に新しい信仰のトレンドを促すためにわざと仕組まれたとか、派内寺院の新しい重税制度から目をそらすために仕組まれたなどの陰謀論に至るまで、いやはや多様な意見が噴出した。ご門主のメッセージがこれほどまでに宗門のみならず、一般社会の関心を集めたことはかつてなかったことだ。私もこの事件がきっかけに領解文について勉強させていただいたことは有り難いことでもある。

しかし、今のところ宗会をバックボーンにした総局は何の積極的な対応の動きはないが、勸学寮頭と総長の辞任という老獪な手を打って自然鎮火を待つ構えのように外目には映る。

その結果、はしごを外されたご門主と「新しい領解文」がそのまま残されることになる。本願寺新報の一面には現在もこの領解文が何も問題がないように掲載されている。その後新しい勸学寮頭と新総長が決められて何事もなかったように教団運営が続け

られる。組織の構造的な変革が起こらない限り残念ながら今まで通りである。

ネット上ではその特性上「新しい領解文」に対して批判的であるものが多いが、無関心なサイレント・マジョリティーはその性格上、表面上は肯定的である。私も含め一般僧侶や門信徒にはこの教団の上意下達の慣習が身に染まっているためか、至って平然としていられる。物言えば唇寒しである。しかし、これに乗じて総局が反対意見を権威で威嚇して形式的に封殺するならば将来に大きな禍根を残すだろう。

ただ、注目すべきは、少数ではあるが、「新しい領解文」に親しみやすさを持つ若者がいるのも事実だ。彼らの言い分はこうだ。従来の領解文は余りにも難解な言葉が横溢し、宗学の素養を持たない者にとっては呪文でしかない。その点「新しい領解文」（浄土真宗のみ教え）は現代人にも表面上直感的にある程度理解できる。これを契機に真宗の教えに興味を持ち、徐々に領解の本質を理解できる様になるかも知れぬ。従って、宗学的に正確で厳密的な領解を最初から掲げるのではなく、自発的に真宗の教えへの関心と学ぶ意欲を引き出す誘いとすべきだ。まず、新たな領解文を教育的な観点から分かりやすい題材として提示し、そこからさらなる深化した領解を逐次指導することによって、古い領解文の価値を現代において再発見することになる。と言った考えだ。バージョンアップの要領で浅い領解から深い領解への段階的導きが現代という時代には必要なのかもしれない。

私のような者でも「新しい領解文」の中に、息絶えるまで続く煩惱具足の悲しみと老病死を突き抜ける信心歓喜の一念を読み取ることは難しい。宗学者にとっては二種深信の懺悔と機法一体の歓喜の無い領解はなおさら受け入れ難い事だろう。

しかし、宗学理論と信仰の真実の関係はそう簡単

ではない。いくら明快に往生の理論を提示されても信仰には直接結びつかないし、一方、リアルな信仰体験は理論によって強化され固着するものである。従って、宗学の専ら目的は幾多の陥りやすい間違った安心を指摘することになる。

上述のように、古い領解文は中世から近世にかけて、古い言語感覚の上で熟成されたものである。近代以降、日本人の個人意識の形成と深くリンクした



総局を代表する石上総長は、今回の大法要が円成したのを期に健康上の問題から辞職を表明。新しい総長には前総長の意志を嗣いで池田行信氏が選任された。辞任に当たっては「新しい領解文」に対して手続き上の齟齬はなく、あくまでも勸学寮に承諾を得たとし、消息を取り下げ権限が総局にないことを表明している。

言語感覚をベースに紐立てられる表現方法は古い伝統的な言語空間でのそれとは明らかに異なる。古い領解文を古い言語空間で理解することは相応の訓練や努力はいるが不可能ではない。しかし、これが新しい言語空間に突然置かれた場合、極端に言うところの意味不明で放棄するか、何とか読み取るにとすると著しい歪曲と見当違いが生ずる。このことから如何に大切な聖教の言葉も不用意に異なる言語空間にさらけ出すことは危険であると言わざるを得ない。

以上の観点からこの度の新しい領解文の発布も、古い領解文がそうであったように、歴史的時間による熟成を大局に見据え、新しい宗学の発芽を期待した上でその価値を問い直すべきなのである。

さらに愚考すると、近代的自己と日本的自己の相違である。如何なるものにも超絶して自立する西欧的個人と他者との関係において成り立つに日本的個人との差異である。百五十年の歳月をかけて、日本の近代化は日本人の内面に影響を与え、日本的個人から西欧的個人への擬似的転換を遂げた。

問題は、自由と人権と平等を意識する独自性の強いこの個人が、その内面的信仰の告白を公に述べさせられることのナンセンスである。この問題を不問にして現代的な領解などあり得ない。なぜならば、信仰的領解は他人に強要されるものではなく、極めて個人的なもので、集団で唱和し、予定調和するものではないから

だ。これを独特の教化プログラムの開発と実践を通して巧妙にコントロールすることを洗脳と言う。多くの新宗教が好んで用いる手法であるが、この問題を無視すると、どんな形態の領解文が登場しても所詮その意味は歪曲され形骸化し、本来の意味をもつことはないように思う。

この度の新しい領解文の表明には若いご門主の将来の宗門に対する危機と大志を背後に感じる。我々門末はその真意を汲取って、今後とも何度でも良いからご門主自身ご領解の発言を吐露され、新しい言語空間のなかで近代的個人を突き抜ける堂々の表白がなされることを切望する次第である。

本徳寺住職 大谷昭仁

